

# 「俺、やっぱりアンタのガキだ！」

—肝硬変の“父”に振り回されるも失業の辛さを癒された証券マン

映画・健康エッセイスト こもり 小守ケイ

「ひろし 絃じゃなあ？会いたかったぞ！」。節分前夜の東京杉並区。帰宅中の30代の証券会社員、葺崎絃は自宅近くで浮浪者風の男に呼び止められる。「わし、笹一じゃ。親の名前は覚えてるじゃろ」。

怪訝な顔の絃が、「いや、僕の親父はとっくの昔に死んだんです」と立ち去ろうとすると、「君代がそう言ったんじゃろ」。

君代とは確かに母の名！絃は一瞬、ためらうも「その名前はお袋から聞いたことがあります」。男の顔は弾け、「30年ぶりじゃ！ゆっくり話そう。今夜、泊めてくれんか」。

映画は笹一を山崎努、絃を佐藤浩市、絃の妻を斉藤由貴が演じるコミカルで温かな家庭劇。バブル崩壊で失業した会社員が、荒っぽい言動で迷惑だが憎めない父に接し、人生を見つめ直す姿を描く。ベルリン国際映画祭など映画各賞受賞作で、01年に53歳で死去した名匠、相米慎二監督の遺作。

## 「あの人、本当に貴方のお父さん？」

「お前が5歳の時、漁業に失敗、家を出た」。逆玉で妻の実家の大きな家に住む絃が、遠慮しながら笹一を連れ帰ると、彼はシャツに腹巻姿で応接間の中央に座り、「1週間だけおいてくれや」。妻や義母が不審がる中、「絃も飲め！」と上機嫌で杯を重ね、寝入ってしまう。

翌朝、笹一はねじり鉢巻きにくわえ煙草で、酒を手に広い庭へ。「バラの世話でも」。すると、絃の幼い息子の満が「見て！」と絃の飼っている鶏を自慢し、迷惑がっていた妻や義母も笑みを浮かべる…。

一方、絃は“父の死”の真偽を母に尋ねに急遽、帰省。しかし、「死んだ」は嘘だが、笹一は構うなとはぐらかされ、その上、家では節分の鬼役の笹一が妻や義母、満と息を切らして大騒ぎ！会社も破綻寸前の頃、家にも面倒が起き、絃は頭が痛い。

## 居ると迷惑だが、居ないと気になる

「もう10日だ」。絃は焦るも笹一は居座り、昼酒の日々。しか

し、満に博打を教え、絃の大切な鶏も鳥鍋にし、挙句に義母の入浴を覗いた時、遂に絃が「出てけッ！」。仕方なく笹一は近くの公園で暮らし始めるが、雛祭りも近い夜、酔っ払いに絡まれた所を絃に助けられ、また家へ。

「おじいちゃん！ヒヨコだよ」。家では無邪気な満や大らかな妻が優しく迎え、義母も受け容れる。その姿に絃も救われ、「皆で鳥小屋を直そう！」と男三代で大工仕事。しかし、その翌朝、朝刊一面に「日豊証券、更生法申請」。絃は慌てて家を出るも足が前に進まない…。

その頃、絃の窮状を見かねた母が上京、「実は絃は浮気で出来た子供」と大芝居を打つ。「俺が？」。



発売・販売元：松竹株式会社 映像商品部  
写真：庭の鳥小屋の前でヒヨコを見る家族  
(時計回りに満、絃、笹一、絃の妻)

## 映画「あ、春」

相米慎二 監督、1998年、日本

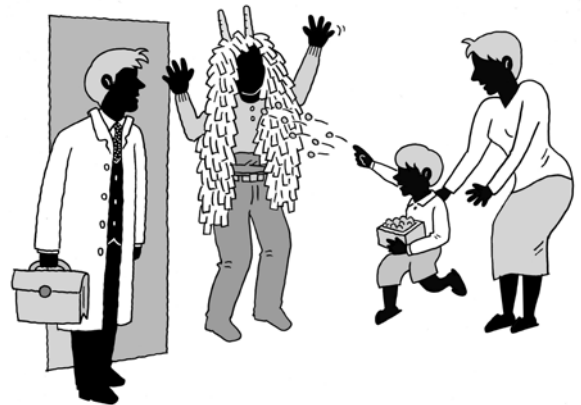
絃は唾然とするも何故か笹一は納得し、「そうなら、ここにおれん」。出て行こうとするや突然、倒れる。「出血だ、救急車！」。

こえ、笹一のお腹の上にヒヨコが！「あの卵、食べないで温めていたのね」。病室に和やか空気が流れ、絃は、粗野ながら皆に愛された笹一を想う。「人生、どうにかなるさ」。

### 「こんなになるまで酒を飲んで…」

「肝硬変の末期で食道静脈瘤破裂の吐血」。笹一は黄疸もひどく、顔は土色、目は黄色。しかし、翌日、妻と満が“産みたての卵”を手に見舞いに行くと、「酒が欲しい」。妻は拒むも公園生活仲間の差し入れか、絃が見舞いに寄ると、屋上でホロ酔いの笹一が“漁師の歌”を。それは絃が幼い頃に聞き覚えた“父の歌”だった！

庭に鯉のぼりが泳ぎ、笹一が入院して約20日の夜、絃が初めて妻に弱音を吐く。「会社、倒産した…」。丁度その時、笹一死亡の電話。夫婦が到着すると、まだ温かい布団の中から小さな音が聞



## 肝硬変、治療は慢性肝炎のうちに

肝硬変とは、慢性肝炎の悪化により肝臓全体が硬く縮小し、代謝や解毒、栄養などの肝臓本来の機能を失った病気である。ウイルスやアルコールなどによる肝炎が治らず、破壊された肝細胞が、炎症と再生を繰り返して線維成分に変わった慢性肝炎の終末像で、その4割は肝がんになると言われている。

初期症状は食欲不振や疲れやすさ、体重減少などで、重症化すると黄疸や下肢の浮腫、腹水などが出現する。末期には食道静脈瘤破裂による吐血や、肝臓の解毒作用の低下による肝性脳症という意識障害が起こる。

日本では肝硬変患者数は約40万人と推定され、その80%はウイルス性肝炎が原因だ。一方、アルコール性肝炎が原因の肝硬変は日本では全体の10%に過ぎないが、欧米では80%を占めている。日本と欧米との間で差が大きいのは、日本人の飲酒量が欧米人の半分程度だからである。しかし、日本人でも日本酒なら3~4合、ビール中瓶なら3~4本以上を毎日飲むと、男性では5年でアルコール性肝炎、15年で肝硬変に進行する。女性は肝臓のアルコール分解能力が男性の2/3なので、さらに少量の飲酒で肝硬変になる。

肝硬変になると治療法はないので、飲酒は適量を守ることが肝要である。

### 監修

結核予防会 理事  
総合健診推進センター長

みやざき しげる  
宮崎 滋